

こどもの水の事故に注意！

東京女子医科大学八千代医療センター
あべとうた
阿部 昂太 医師

こどもが溺れる時、どんな様子を想像しますか？ 実は、保護者の8割以上が「助けを求める声が聞こえなかった」と答えています。つまり、こどもは声を出さずに、静かに溺れます。また、赤ちゃんから小学校入学前（6歳前後）までは、わずか3cmほどの水深でも溺れる可能性があると言われています。水があるところでは、どんなシチュエーションでも注意が必要であることを知ってください。



症状別応急処置について

● こどもを水から引き上げて、安全な場所で観察しましょう。

① 呼吸をしていない

呼びかけに反応がない場合

- ▶ 最もパニックになりやすい場面ですが、落ち着いて
- ①～③を行う

① 人がいたら
助けを呼ぶ



② 119 番に
救急要請



③ 人工呼吸と
心臓マッサージを行う

② 嘔吐している場合

- ▶ 体の左側を下に傾けて、吐いたもので空気の通り道がふさがらないようにする
- * 口の中に指を入れると、こどもの口を傷つけたり、保護者のけがにつながるため避けてください。

③ 反応がある、いつもと同じように見える場合

- ▶ 水を拭き取り、体温が下がらないようにする
- * 今元気に見えても、あとから症状が出る場合があります。溺れてしまった場合は、症状がなくても医療機関を受診することをおすすめします。

予防について

大切なことは、水がある場所にこどもを1人で近づかせないことです。しかし、それだけでは根本的な予防とは言えません。「目を離さない」ことは重要ですが、わずか数秒の間でも事故は起こります。海や川のレジャーではライフジャケットを着用し、自宅内では浴槽の扉にこどもが届かない高さに鍵をかける、一緒に入浴していても浴槽内に1人にしない、浴槽内にお湯を残さないなど、環境そのものを安全にする工夫が必要です。



**こどもは声を出さず、静かに溺れます。
その事実を知り、行動を変えることが、こどもの命を守る第1歩です。**